

FOCUS Next

骨粗鬆症診療をメインに掲げ 健康寿命の延伸をめざす



森石 丈二 先生 医療法人社団紺整会 船橋整形外科 市川クリニック 院長

仲島 佑紀 氏 医療法人社団紺整会 船橋整形外科 市川クリニック 理学診療部部長

池田 由佳 氏 医療法人社団紺整会 船橋整形外科 市川クリニック 看護師

(千葉県市川市)

医療法人社団紺整会 船橋整形外科 市川クリニックは骨粗鬆症をメインとした診療を行っています。“健康寿命の延伸”をその目的に掲げ、専門性の高い多職種が積極的に介入することに特徴があります。院長の森石丈二先生と2人の医療スタッフに骨粗鬆症診療についてお話を伺いました。

多職種の専門性を生かした骨粗鬆症診療

最期まで自立した生活の実現を支援

船橋整形外科 市川クリニック院長の森石丈二先生は、「この地域で暮らす人たちの年齢層を考慮して、骨粗鬆症を診療のメインとすることを決めました」と振り返ります。同クリニックは、千葉県船橋市や市川市に病院やクリニックを展開して高度な手術や広範な専門領域に対応する船橋整形外科グループの一つです。その中で骨粗鬆症をメインとする診療は独自性の高い方針といわれています。「当クリニックの開院時、私の前任地である船橋市よりも患者さんの年齢層が高いことに気付きました。詳しく調べてみると平均で約10歳も高く、女性が多かったのです」と森石先生は話します。

整形外科医としての森石先生のキャリアは、手術を中心とした外科的治療が多くを占めてきました。しかし、骨折や怪我、痛みを一時的に治すこと以上に、人生の最期まで自立して生きることを支援が大事だと考え、この地域で求められる医療が外科的治療よりも骨折予防であると思ったと言います。

森石先生は2017年に一般社団法人 日本骨粗鬆症学会の認定医を取得しました。同クリニックでは、入職した看護師全員に骨粗鬆症マネージャー®の資格取得をめざしてもらい、そのための費用も全額負担しています。「骨粗鬆症は自覚症状のほとんどない疾患ですから、治療の必要性に関する丁寧で根気強い説明を行い、検査数値の変化などを提示して、患者

さんのモチベーションをコントロールすることが重要です。しかし、医師1人の目線では治療への不安や疑問など患者さんの本音を把握することはできません」と森石先生は話します。

患者さんの不安や疑問は、治療中断や脱落に直結することがあります。また、薬剤治療は種類も多様で注射投与等の間隔も異なることから、患者さんの治療継続を促すにはマネジメントの視点が必要だと森石先生は言います。その役割を果たすのが骨粗鬆症マネージャー®です。

資格取得によって生まれた自信

2019年に入職し、2023年に骨粗鬆症マネージャー®の資格を取得した看護師の池田由佳氏は、「先輩が患者さんに注射を打つ際、豊富な知識をもとに語り掛けて患者さんを安心させている姿を見て憧れました」と入職当初を振り返ります。

池田氏が骨粗鬆症マネージャー®の資格取得で得られたのは知識とスキル、そして自信です。専門性の高い知識に裏付けられた説得力のある説明が自信を生み、その自信は会話における余裕にもつながり、患者さんの内面をより深く洞察できるようになったと言います。経験を重ねるごとに患者さんが抱く不安や問題を察知し、そこへの適切な対応にもバリエーションが広がりました。「例えば、薬の副作用に対して不安を抱く患者さんは少なくありません。特に副作用が何パーセントという数字に敏感です。そうした例では、当クリニックでの副作用の状況や、症状が出たり不安が大きくなったりしたらいつでも対応できるといった説明が患者さんの気持ちを和らげることにつながりますね」と池田氏は話します。

また、同クリニックでは注射を予約した患者さんが来院しなかった場合、自宅へ電話を掛けることを徹底しており、それも骨粗鬆症マネージャー®の仕事です。「ほとんどの患者さんは予約を忘れていて、電話をすれば来院してくれます」と話す池田氏は、過去に予約を忘れたことのある患者さんには予約日前日に電話することもあります。そうした積極的な介入によって、患者さんの治療継続率が高まることを経験によって学んだと言います。

骨粗鬆症診療の目的は健康寿命の延伸

運動機能の改善もモチベーションに

森石先生は、骨粗鬆症診療は薬物療法と運動療法が両輪であると明確に示しています。この方針に沿って、同クリニックの骨粗鬆症診療では理学療法士も重要な役割を果たしています。

理学診療部部長の仲島佑紀氏は船橋整形外科グループに2001年に入職しました。「その前年にWHO(世界保健機関)が『運動器の10年』世界運動をスタートさせ、運動器の治療や予防の重要性を訴えていましたから、私自身もその分野に興味を持って働き始めました」と自身のキャリアと世界の潮流を重ねます。理学療法士の仕事について、仲島氏は患者さんの日常生活に触れ、そこでの困りごとを解消するものだと言います。そして、痛みを治して数値を改善させるだけでなく、自宅で無事に生活できるようにすることが重要という考えを持っており、それは森石先生の方針と合致します。

同クリニックのリハビリテーション室では、約40人の理学療法士が患者さんに合わせたメニューでリハビリテーションを行っています。骨粗鬆症の患者さんに対しては、自重を利用した荷重系トレーニングとしてのチェアスクワット、踵を踏み鳴らすマーチング運動などのほか、筋力測定も積極的に行っています。「筋力測定を含めた運動機能テストを定期的に行うことによって、数値の改善が患者さんの治療へのモチベーションを高めてくれることも狙いにあります」と仲島氏は話します。また、骨粗鬆症の予防的な視点から、若年層に対しても骨粗鬆症に関する教室を開き、疾患の啓発や教育にも余念がありません。

医師と多職種の垣根のないコミュニケーション

骨粗鬆症マネージャー®の資格を有する看護師と骨粗鬆症

への理解が深い理学療法士は患者さんの思いを聞き取りながら、薬剤治療の変更や中断、リハビリテーションメニューの見直しを医師へ迷うことなく提案しています。「森石先生は私たちの意見にしっかり耳を傾けてくれます」と話す池田氏に仲島氏も同意します。一方、森石先生も、「骨粗鬆症の知識を十分持った上で、医師にはない看護や理学療法の専門性を持っているのですから、彼らの能力を尊重しない理由はありません」と話します。

開院から10年以上経過した現在、地域で骨粗鬆症の認知度が高まっていることを森石先生は感じています。診察室やリハビリテーション室、無料講座などで地道に取り組んできた啓発の成果だけでなく、骨粗鬆症診療を前面に打ち出した同クリニックの診療スタイルが地域への啓発につながったという側面もあるのではないかと考えています。

今後の課題は、一次骨折予防のための啓発や転倒・転落防止の教育であると3人は声をそろえます。それは患者さんの健康寿命の延伸をめざすためであり、森石先生をはじめとする全スタッフの取り組みは続きます。



豊富なトレーニング機器や検査機器が置かれたリハビリテーション室では、トレーナーによる体操指導も実施しています。

POINT

- ・高齢者の多い地域事情に照らして骨粗鬆症をメインとした診療を行っている。
- ・看護師全員が骨粗鬆症マネージャー®の資格を取得している。
- ・健康寿命の延伸をめざして専門性の高い多職種で患者さんを支えている。